

幸手市文化遺産だより



VOL.20

●「芸術写真」に取り組んだ青年アマチュア写真家たちの群像



浜田得一と「東武写壇」のアマチュア写真家たち

- 【前列左から】高橋富路（杉戸町〔現 杉戸町〕）・峯岸正（上高野村〔現 幸手市〕）・中村保次郎（篠津村〔現 白岡市〕）・浜田得一（上高野村〔現 同前〕）
- 【後列左から】内山儀平治（杉戸町〔現 同前〕）・岩井春治（百間村〔現 宮代町〕）・杉田長蔵（杉戸町〔現 同前〕）・中村利道（百間村〔現 同前〕）・西村司郎（礼羽村〔現 加須市〕）
- 【右上別枠】池田孝一（幸手町〔現 同前〕）

この集合写真は、昭和7年（1932）11月10日に東武写壇が編集・発行した同人誌『むさし野』創刊号に掲載されたものです。東武写壇は、芸術写真の研究を中心とするアマチュア写真家たちの勉強会で、浜田得一も同人として一緒に活動しています。集った同人は、浜田得一のほか、現在の幸手市をはじめ、杉戸町、宮代町、白岡市、加須市のアマチュア写真家たちです。

『むさし野』創刊号は、浜田得一をテーマに開催した令和4年度幸手市郷土資料館特別展で展示しましたが、今回その概要についてあらためて紹介したいと思います。

これにあわせて、浜田得一のお孫さんでフォトグラファーの塩澤秀樹様の特別寄稿を掲載します。

ているような気がいたします。視覚的にじっくりくるポイントを心得、探していたのではないかと想像しております。震災、災害の写真は、心の痛みを伴った記録として使命感を持って撮影していたのではないかと想像します。

この度特別展を開催していただき、写真作品を通して祖父・得一から力ももらっております。写真そのものに命が宿っているのではないかとさえ思わせてくれます。時を超え、何かを語りかけてくるような気さ

えいたします。浜田得一の写真に価値を見出して下さった皆様にあらためまして感謝申し上げます。写真からは、幸手という町に対する強い郷土愛を感じます。そして写真に対する熱き情熱が伝わってきます。得一が歩んだ道程が、写真という足跡として残され、皆様の心に何かしらの想いが伝わったのでしたら祖父・得一も本望であったのではないかと思います。

令和5年（2023）2月
浜田得一の孫・フォトグラファー塩澤秀樹

令和4年度 企画展「郷土資料館 雛まつり」開催中

令和5年2月1日(水)から3月26日(日)まで

恒例となった雛人形の展示です。明治時代から昭和時代までの資料をたくさん展示します。



ぜひ一度、ご覧ください。すてきなお雛様がお待ちしています。

郷土資料館



豪華な「御殿飾り」



台乗り人形(女学生)

幸手市郷土資料館 利用案内

開館時間 午前9時から午後5時まで
入館料 無料
休館日 月曜日（祝日の場合はその翌日）、
年末年始

新型コロナウイルスの感染状況により、郷土資料館の利用内容を変更する場合があります。



歴史展示室 民具資料展示室

二つの展示室をご覧ください

アクセスマップ



● 編集後記 ●

今回は、浜田得一のお孫さんの塩澤秀樹様から玉稿をいただきました。浜田得一の人となり伝える貴重な証言資料です。ありがとうございます。引き続き、浜田得一が取り組んだ「芸術写真」など、幸手の写真文化史の調査研究をすすめていきます。

幸手市文化遺産だより 第20号

令和5年3月1日発行

編集：幸手市郷土資料館
〒340-0125 幸手市下宇和田58-4
TEL 0480-47-2521
発行：幸手市教育委員会



幸手市郷土資料館
ホームページQRコード

令和4年度、幸手市郷土資料館の特別展では、「アマチュア写真家 浜田得一撮影 幸手町記録写真集—大正・昭和のふるさとの風景—」を開催しました。

この展示は、浜田得一が幸手の風景を撮影した5冊の写真アルバムを「浜田得一撮影幸手町記録写真集」として市指定文化財に指定したことを記念したものです。大正時代から昭和時代に浜田得一が撮影した写真の展示は、多くの市民からご好評をいただきました。



『むさし野』(創刊号)の表紙

『むさし野』創刊号の概要 『むさし野』は、東武写壇が発行した芸術写真研究のための雑誌です。非売品で発行部数も少なかったためか、浜田得一も、昭和7年(1932)11月10日に発行された第1巻第1号の創刊号1冊と昭和8年(1933)1月に発行された第2巻第1号1冊の合計2冊しか遺していません。

編集兼発行者は、峯岸正。発行所は、杉戸町の高橋富路宅におかれた「東武写壇事務所」です。

創刊号の構成は、峯岸正の「創刊の辞」にはじまり、表紙に掲載した「同人の集合撮影」写真につづき、浜田得一の作品「郊外風景」のほか同人4人の「印画(写真)」合計5点が掲載されています。

つづいて「武井勝蔵先生」の和歌2首と、「中島謙吉先生」「萩原露愁先生」の寄稿による祝詞を載せ、さらに『むさし野』第2巻第1号の編集後記で「自叙伝式記事」と評された同人8人の文章があります。

このほか、浜田得一「写真入門と東武写壇の創立される迄」と「印画データと作者の感想」が続き、巻末に同人氏名と「編集後記」で結びとなります。

以上が『むさし野』創刊号の概要です。詳しい内容をご紹介できませんでしたが、郷土資料館では、調査研究を深め、浜田得一をはじめ、当地域のアマチュア写真家について明らかにしていきたいと思えます。

得一が遺したアマチュア写真史関係資料 浜田得一が遺したものは、幸手の風景写真だけではありませんでした。展示でも紹介したように、清光会をはじめ、東武写壇や東武写真連盟など、写真を愛好する同志の集まりに積極的に参加し、写友との交流を深めた浜田得一は、そうした会の活動記録類を終生大切に保管していたのです。

それらは、これまであまり知られていなかった、幸手を含む埼玉県東部地域のアマチュア写真家たちの活動や創作の歴史を物語る貴重な資料となっています。

東武写壇と『むさし野』 なかでも、東武写壇を結成した浜田得一をはじめとする青年たち(表紙参照)の活動は、特に注目されます。

昭和初期、写真に美を求め、絵画のような作品を生み出そうとする「芸術写真」の制作にひたすら情熱を傾けたアマチュア写真家たちは、共に相語らい、同人誌『むさし野』を誕生させたのです。



郊外風景 浜田得一(幸手町東端茨城県境)



七夕風景 峯岸正(久喜町(現久喜市)郊外)



浜田得一一家 家族全員の集合写真(昭和18年撮影)



浜田得一・サイ 結婚五十年記念写真(昭和47年1月撮影)

幸手市郷土資料館の令和4年度特別展として、「アマチュア写真家 浜田得一撮影 幸手町記録写真集—大正・昭和のふるさとの風景—」が開催されました。浜田得一(故人)は、明治33年(1900)11月24日に生まれ、平成元年(1989)3月14日に88歳の生涯を閉じました。この度、祖父・得一の写真資料が、市指定有形文化財に認定されましたことに心より感謝申し上げます。文化財としての価値をお認め下さった幸手市関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。膨大な写真、記録等を整理し、皆様にお伝え下さった郷土資料館のご担当者様、本当に有難うございました。

私は得一の孫の塩澤秀樹と申しまして、現在フリーランスのフォトグラファーとして活動しております。祖父・得一に暗室でのプリント作業を教わり、その魔術に魅せられて写真の道へ進みました。

母・千代子(得一の四女)の証言によると、得一は芯の強い人であったとのこと。思っていることを実行する人だと語っています。鍛冶職人であり、仕事が器用で働き者であったそうです。仕事重視で、特に男子に対しては厳しかったと言います。半端なことをしたら立たせたとのこと。その反面、子供たちをどこへでも連れて行ってくれたとも語っております。男女含め12人いた子供たちの世話は、妻のサイのほか、子守りを一人ずつ付けたと聞きました。

また子供たちが学校へ行きたいと言えば、学費を出してくれたそうです。それは得一自身、勉強がしたかったけれども願いが叶わなかったからだと言います。妻サイは「こうと決めたら必ずやる人だよ」と言っていたとのこと。それゆえに頑固だったという話もあります。

得一は鍛冶職人であり、器用であり道具づくりに長けていたとのこと。三脚の自由雲台の特許を持っていて、自身で道具を開発しておりました。好奇心、探究心が旺盛で、創意工夫することが好きであったことなどが伺い知れます。そのような得一が、写真を趣味として、初めて蛇腹付きのカメラを苦勞して手にした時の喜びは半端ではなかったことと想像します。撮影、現像技術を自分のものとするのは容易(たやすい)ことではありません。ただやると決めたことはとことんやる、という得一の気性、性格が趣味の分野においても創造的に開花したのではないかと思うのです。仕事熱心で大家族を支え、写真術にはまり、そして趣味を通じた仲間づくり…そんな精力旺盛な得一の人物像が浮かんできます。その反面よく風邪を引き、高齢になってからは2回ほど軽い脳梗塞を患っていたとも聞きました。

写真作品を見る限り、単なる記録というだけではなく、プラスアルファの芸術的な要素が多分にあると感じます。全体のバランス、構図、人物やモノの配置などに表れ